

Title	宮沢賢治『土神ときつね』論 : 樺の木の存在を視座として
Author(s)	西村, 真由美
Citation	語文. 2006, 87, p. 64-77
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69083
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

宮沢賢治『土神ときつね』論

――樺の木の存在を視座として――

語り手の枠を越えて

で、語り手は次のように語る。う二人の男たちの関係をめぐる物語である。この物語の冒頭の章『土神ときつね』の物語は一本の女の樺の木と、土神と狐とい

この木に二人の友達がありました。 人は丁度五百歩ばかいるやうなことをしなかったのです。 人は丁度五百歩ばかあやうなことをしなかったのです。 人は丁度五百歩ばかわるやうなことをしなかったのです。 人は丁度五百歩ばかわるやうなことをしなかったのです。

語り手はこの物語を語り始めるにあたって、「一人は~、一人は

西 村 真 由 美

にも述べる。神と狐を悉く対比させて語っている。さらに、語り手は次のよう

~」「土神の方は~、狐の方は~」という並列の表現を用い、土

で狐は少し不正直だったかも知れません。たゞもしよくよくこの二人をくらべて見たら土神の方は正直

直」なのかは非常に不明瞭である。「土神の方は正直で狐は少した。」という土神の「正直」さも、一体何をさして「正いるかのように見える。しかし、実際その後に語られていく物でいるかのように見える。しかし、実際その後に語られていく物いが実は土神の方が内面的に優れているのだ、と土神に肩入れしいが実は土神の方が内面的に優れているのだ、と土神に肩入れしいが実は土神の方が内面的に優れているのだ、と土神に肩入れしいが実は土神の方が内面的に優れているのだ、と土神に肩入れしいが実は土神の方が内面的に優れているのだ、と土神に肩入れしいが実は土神の方は正直で狐は少した。

手はほぼいないに等しいだろう。かかわらず、読後に、それがこの作品のテーマだったと思う読み不正直」という〈読み〉の指針のようなものを語り手が示すにも

ている。一つは嫉妬の問題であり、他の一つは都会と田舎の問題いる。小沢俊郎氏は、「「土神と狐」の主題を、僕は二つあると見二者を比較し、その対比を読むという姿勢は色濃いものとなってなからず影響を与えるようだ。先行研究においても、土神と狐のが、語り手の「くらべ」るという姿勢は、読者の〈読み〉に少が、語り手の「くらべ」るという姿勢は、読者の〈読み〉に少

のみを読み取ることに停まっては、物語の広がりを見失うことにるのかもしれない。しかし、このような語り手の強調する一方向の〈土神と狐を対比させる〉という姿勢が少なからず影響していの〈土神と狐を対比させる〉という姿勢が少なからず影響していの〈土神と狐を対比させる〉という姿勢が少なからず影響していの〈土神と狐を対比させる〉という姿勢が少なからず影響していの本が狐を選ぶ話、という読みが多く見られるのも小森氏と同様の解釈が近代の象徴である狐を選んだことによって負わされた土神の娘が近代の象徴である狐を選んだことによって負わされた土神の

う視点からの対比性を指摘している。また、松田司郎氏が「人々狐を「「近代」を表象する存在」とし、〈前近代〉と〈近代〉とい読み取っている。小森陽一氏は土神を「近代日本からの逸脱者」、

から忘れられ、想いを寄せる娘(樺の木)から疎んじられ、その

である。」と述べ、狐に都会、土神に田舎という対比的な要素を

先行研究にも多く指摘されるように、先に挙げた本文に限らず、

なりはしないだろうか。

んだ」と太陽を話題にしている。次の一文でも、土神と太陽・日本によるでわかめに似、いつもはだしで爪も黒く長い」という汚いで、土神が嫉妬心に耐えきれず逃げ去る方向も「北の方」となっている一方、狐は「仕立ておろしの紺の背広」に「赤革神の土神に対して、狐は「仕立ておろしの紺の背広」に「赤革神の木のもとにやってくるのは「夏のはじめのある晩」「もう神の木のもとにやってくるのは「いつも野原の南の方からやってのが」という為麗な洋装である。また、土神がやってくるのはでまるでわかめに似、いつもはだしで爪も黒く長い」という汚いてまるでわかめに似、いつもはだしで爪も黒く長い」という汚いてまるでわかめに似、いつもはだしで爪も黒く長い」という汚いてまるであかめに似、いつもはだしで爪も黒く長い」という汚いてまるであり、活題としている。次の一文でも、土神と太陽・日本の大ったができる。「きものだってまるであり、土神と太陽・日本の大ったが、土神と太陽・日本の大ったが、土神と太陽・日本の大った。

を組みキリキリ歯噛みをしてその辺をうろうろして(以下土神は日光を受けてまるで燃えるやうになりながら高く腕

光が密接なものとして描かれていることが伺える。

対比がみてとれる。 ここにも、土神には〈朝〉・〈太陽〉、狐には〈夜〉・〈星〉という

しかし、彼らが持つのはこういったコントラストだけではな

は何だ結局狐にも劣ったもんぢゃないか、一体おれはどうすればという狐と、「あゝつらいつらい」「けれどもそのおれといふものたつい嘘を云ってしまった。あゝ僕はほんたうにだめなやつだ。」ことも注意せねばならない。「あゝ僕はたった一人のお友達にま

に〈高く腕を組む〉というポーズが共通していることも注目され通していることは明確である。また、次の場面で、狐と土神両者いゝのだ」という土神は、ともに煩悶を抱えているという点で共

ましたがなかなかそれで落ちませんでした。 ①狐は又鷹揚に笑って腕を高く組みました。詩集はぷらぷらし

下略)」 「星に橙や青やいろいろある訳ですか。それは斯うです。(以

(中略)土神は歯をきしきし嚙みながら高く腕を組んでそこ②「狐なんぞに神が物を教はるとは一体何たることだ。えい。」

らをあるきまはりました。

けてまるで燃えるやうになりながら高く腕を組みキリキリ歯③「しかしながら人間どもは不届だ。(中略)」土神は日光を受

にしませう。」とお茶を濁して帰ってしまう。また、②では、分いう樺の木の問いにはっきりと答えられず、「だけどそれは今度①で「腕を高く組」んだ狐は、星に様々な色があるのはなぜかと嚙みをしてその辺をうろうろして(以下略)

面的に見て取れる二者の様子は、非常に対照的である。しかし、①で狐は「鷹揚に笑」い、②で土神は「歯をきしきし嚙」む。表が、神としての矜持から自分の力を誇示しようとする場面である。が、神としての矜持から自分の力を誇示しようとする場面である。が、神としての矜持から自分の力を誇示しようとする場面である。が、神としての矜持から自分の力を誇示しまう。また、②では、分にしませう。」とお茶を濁して帰ってしまう。また、②では、分にしませう。」とお茶を濁して帰ってしまう。また、②では、分

を裏付ける。 この共通性は土神と狐がただ対比的のみな存在なのではないこと 者には〈高く腕を組む〉というポーズが共通して用いられており、本当はできないのにできるかのように無理をして振る舞う時、両

じ荒廃と空虚をかかえた狐もひとりの「修羅」なのであろう。」とした上で、「土神はひとりの「修羅」なのだ。それならば、同変えれば一つの調和した全体の分裂した二面を暗示するだろう。」大沢正善氏も「ことごとくに対立する二つの個性とは、見方を大沢正善氏の

狐は上品で親切で不正直で虚構の夢想家で新時代の知を追及する貧相で正直で厳粛な理想家で旧時代の知を順守する存在であり、と、その共通性にふれている。しかし、一方で、「土神は乱暴で」。

存在である。」と、両者を〈旧〉と〈新〉という対比で捉えてい

により、従来の読解とは異なる見解を提示し、その上で樺の木とであった樺の木の存在や、テクストの細かな〈ことば〉への着目な配ったとき、この作品に新たな一面を見いだすことが可能とと狐の対比という枠組にとらわれずにテクストの細かな記述にもることに変わりはない。しかし、冒頭で語り手が強調する、土神

二、土を忘れる樺の木―樺の木・土神・狐の同質性―

いう女性像について考察を深めることをねらいとする。

青い葉をきらきらと動かし」たり「顔いろを変へて日光に青く樺の木について大沢氏は、「樺の木は「青」で徴しづけられ、

しめす東北方言であることにふれた後、「賢治はいくつかのテクとして読者の目にうつる。一方で大塚常樹氏は、樺の木が山桜を本の奇麗な女の樺の木」の姿は、非常に柔和でもの静かな女性像本の奇麗な女の樺の木」の姿は、非常に柔和でもの静かな女性像本の奇麗なせる。」としている。確かに、「そっと返事」をし、力を想起させる。」としている。確かに、「そっと返事」をし、力を想起させる。」としている。積絶な女性的魅すきとほりせはしくせはしくふるへ」たりする。清純な女性的魅

ストで、同時代の萩原朔太郎や室生犀星、梶井基次郎らの詩人た

かう青いもんだらう。黄や白の花さへ咲くんだ。どうもわかの日誌〕『小岩井農場』など)から、『土神ときつね』も《性意の日誌〕『小岩井農場』など)から、『土神ときつね』も《性意識》を扱ったテクスト」であり、「単純に、樺に《無垢性》を読識を扱ったテクスト」であり、「単純に、樺に《無垢性》を読さしている。本論ではまず、樺の木について考えるにあたって、この女性が、木〉として設定されたことに着目することから始めたい。

の中からばかり出て行くもんだ、それにもやっぱり赤や黄いんな。たとへば秋のきのこのやうなものは種子もなし全く十んな。たとへば秋のきのこのやうだがそれでもやっぱりわからいませうか。」

らんねえ。」

ろやいろいろある、わからんねえ。」

狐さんにでも聞いて見ましたらいかゞでございませう。」

つい斯う云ってしまひました。樺の木はうっとり昨夜の星のはなしをおもってゐましたので

いることは興味深い。また、樺の木に付された方角も見逃せないいることは興味深い。また、樺の木に付された方角も見逃せないましたらいかゞでございませう。」という言葉からは、樺の木が、みられる。しかし、土神の疑問に対して「狐さんにでも聞いて見みられる。しかし、土神の疑問に対して「狐さんにでも聞いて見みられる。しかし、土神の疑問に対して「狐さんにでも聞いて見るが、木として土に生えているはずの樺の木が、それにまつわるるが、木として土に生えているはずの樺の木が、それにまつわるるが、木として土に生えているはずの樺の木が、それにまつわるるが、木として土に生えているはずの樺の木が、それにまつわるるが、木として土に生えているはずの樺の木は土をめぐるものであり、この点で樺の木は「ございま木は土から生えているものであり、この点で樺の木は土神の恩恵木は土から生えているものであり、この点で樺の木は土神の恩恵木は土から生えているものであり、この点で樺の木は土神の恩恵

には一本の奇麗な女の樺の木がありました。がありました。いのころぐさがいっぱいに生え、そのまん中一本木の野原の、北のはづれに、少し小高く盛りあがった所

ものである。

りと魅かれていることに、この物語の大きな鍵があるのではないれ」にある樺の木が、南の狐の持ってくる詩集や星の話にうっとあるのだ。土から生え、方角的にも土神の北に近い「北のはずるという対比性を確認したが、樺の木は「野原の北のはづれ」に先ほど、土神が北、狐が南からやってくるものとして描かれてい

狐の話を立ち聞きし、「あっちの隅には顕微鏡こっちにはロンド もの、 う三者が三者とも、 話としてではなく、 は、土神が前近代性を、狐が近代性を象徴し、樺の木が狐を選ぶ う存在は〈近代〉といった新時代の表象というよりは、野原の狐 大理石のシーザーは全て嘘であったことが明かされるが、狐とい の巣穴は「がらんと」したただの穴で、狐の言っていた望遠鏡や 設定されていることを重視する必要がある。物語最終場面で、 出してしまうのだ。また、狐の存在も、あくまで〈野原の狐〉と 神までもが、「顕微鏡」や「ロンドンタイムス」の方に価値を見 の話よりも狐の運んでくる新文化を好んだように、土の神たる十 方が自分よりはえらい」と捉えてしまう。土に生える樺の木が十 を盗み聞きすると、土神は「狐の言ってゐるのを聞くと全く狐の ンタイムス、大理石のシィザアが」ころがるという狐の書斎の話 ある。土神は「おれはいやしくも神ぢゃないか」と繰り返すが、 しかしここで改めて留意すべきなのは、土神自身もまた、 新 〈新〉なるものへの憧れの心を象徴しているといえる。この物語 という古くから自然に生息してきた〈旧〉的存在の中にある 従来、 なるものに魅かれていってしまう物語として読むことがで なるものの象徴という対比性が多くの注目を集めてきた。 新文化的なものに魅力を感じてしまっているという事実で 土神は「前近代」や〈旧〉なるもの、狐は「近代」や 自然の中のものである樺の木、 自分たちの生きるべきはずの世界よりも 狐 土神とい 新しい 狐

さるのではないか

三、変化しない樺の木

土神と狐と樺の木には同質性があると二章において述べたが、

悶と同じレベルとは言い難い。この点から考えてみると、 思っていた。「あとですっかり本統のことを云ってしまはう」と 葉に対して、「なぜかそれが非常に重苦し」くて返事しかねると のだがやっと今朝からにはかに心持ちが軽くなった。」という言 に改心した土神の「今年の夏から実にいろいろつらい目にあった 樺の木はどうだろうか。彼女が土神と接する時、「おろおろ声」 狐は思っていたし、土神も「自分で自分を責め」ていた。この二 を抱いていた。そしてこの二者は、そんな自分を変えたいとも 狐は嘘をつき続けている自分に、土神は神らしからぬ自分に悩み いう樺の木の姿が描かれてはいるものの、土神や狐の自己への煩 に対して悩んでいる様子は一切みられない。秋になって、 も土神に対しての恐れという感情でしかなく、樺の木が自分自身 ふるえ」るといった描写が繰り返されているが、それはあくまで であったり、「なんだか少し困ったやう」であったり、「ぷるぷる 者は自分自身の内面に関する煩悶という点で共通している。では、 も、共に煩悶を抱えているという点で共通していた。 三者の関係をさらに考察してみよう。 では、三者は全く同質なのかというと、 先ほども触れたように、土神と狐は対比的な面を付されながら 当然そうではない。この それぞれ、 穏やか

次の記述をみてみよう。 ここで、樺の木の持つ一つの特徴に注目したい。冒頭部にある、性と、土神と狐の二人なのではないかと思われてくる。 存在なのは土神と狐なのではなく、むしろ樺の木という一人の女

け、秋は黄金や紅やいろいろの葉を降らせました。く光り、枝は美しく伸びて、五月には白い花を雲のようにつく光り、枝は美しく伸びて、五月には白い花を雲のようにつ

なっても紅葉が描かれていないことは注目に値する。もその時樺の木が咲かせているはずの白い花は描かれず、秋にされている。ところが、実際にこの作品の中では、五月であってここでは、樺の木は五月には白い花をつけ、秋には紅葉があると

- ぱいについていゝかほりがそこら中いっぱい、(以下略)・夏のはじめのある晩でした。樺には新しい柔らかな葉がいっ
- をきらきらと動かして土神の来る方を向きました。・樺の木は何だか少し困ったやうに思ひながらそれでも青い葉

して描かれているのだ。

様のことがいえる。の葉の青さのみが描かれている。秋の樺の木の描写にもまた、同の葉の青さのみが描かれている。秋の樺の木の描写にもまた、同ここで見られる樺の木の描写には一切「白い花」は描かれず、そ五月三日」といっているとおり、季節は五月のはずである。が、五月三日」といっているとおり、季節は五月のはずである。が、

して風に光りところどころすゞらんの実も赤く熟しました。たがその辺のいのころぐさはもうすっかり黄金いろの穂を出そのうちたうたう秋になりました。樺の木はまだまっ青でし

の木はあくまでも「まだまっ青」であり、全く変化しない存在との木はあくまでも「まだまっ青」であり、全く変化しない存在とは夏に出した緑の穂(窓) 黄金いろの立派な人」が乗った「不思いており、それは仏教において光で比喩される《如来》の身体の野原のはづれがぼうっと黄金いろに」なることや、また『二十六夜』で梟の子が死ぬ時、「金いろの立派な人」が乗った「不思いで』で梟の子が死ぬ時、「金いろの立派な人」が乗った「不思いで』で梟の子が死ぬ時、「金いろの立派な人」が乗った「不思いで』で梟の子が死ぬ時、「金いろの立派な人」が乗った「不思いている。と指摘するは秋になって《聖なる黄金》へと変化しているが、しかし、春さは秋になって《聖なる黄金》へと変化しているが、しかし、春さは秋になって《聖なる黄金》へと変化しているが、しかし、春さは秋になって《聖なる黄金》へと変化しているが、しかし、春さは秋になって《聖なる黄金》へと変化しているが、しかし、春も秋も、常に樺の木は青いままである。一方で、いのころぐさの木はあくまでも「まだまっ青」であり、全く変化しない存在と

あるすきとほるやうに黄金いろの秋の日土神は大変上機嫌でげている。まず、土神について見てみよう。自身について悩み続けた結果、一時的であれそれぞれに変化を遂一方〈変化〉という点で考えた時、土神と狐の両者は共に自分

話したいなら話すがいゝ、両方ともうれしくてはなすのなら意地の悪い性質もどこかへ行ってしまって樺の木なども狐となってかかったやうに思ひました。そしてもうあの不思議に

うっとみんな立派なもやのやうなものに変って頭の上に環にした。今年の夏からのいろいろなつらい思ひがなんだかぼ

本のとの人間では、一時的であれ変化を遂げていたといえる。としていた土神は、一時的であれ変化を遂げていい大いでしまったため、逆上して狐を殺してしまうのではあるが、たってしまったため、逆上して狐を殺してしまうの価値を見出したと解釈できる。しかしその状態は継続せず、再び狐の「赤革したと解釈できる。しかしその状態は継続せず、再び狐の「赤革したと解釈できる。しかしその状態は継続せず、再び狐の「赤革したと解釈できる。しかしその状態は継続せず、再び狐の「赤革したと解釈できる。しかしその状態は継続せず、再び狐の「赤革の靴」や「美学の本」「望遠鏡」に価値を見出し自分の価値を見出したと解釈できる。しかしその状態は、二人を見守ろうとしていた大地は、相手を認め、自ら身を引き、二人を見守ろうとするが、といれば、ことによっているのが見ばしているのと同様、ここでは大きないえる。

また、狐に関してはどうだろうか。

い狐を象徴しているのではないだろうか。

日光のもとにでてきたものの、「本統のこと」をいってしまえな

ら斯う云ひました。をはき茶いろのレーンコートを着てまだ夏帽子をかぶりながその時です。狐がやって来たのです。(中略)狐は赤革の靴

描かれる。このちぐはぐな格好は、嘘をつき、無理をしながらも、を着て、秋になっているのに季節外れの夏帽子といういでたちでこでの狐の姿は、天気は晴れているにもかかわらずレーンコート狐は最期の日、土神がいる時に樺の木に会いにきてしまうが、こ

さ〉を示すのではないだろうか。 たような清純さをしめすものなのではなく、彼女の内面の〈青つになっても青いままとされる樺の木の色彩は、大沢氏の指摘し対して、樺の木は悩みもせず、なんの変化もしないのである。い対して、神の木は悩みもせず、なんの変化もしないのである。い自分自身の内面について悩み、自分を変えようと格闘しながら、

四、樺の木と女学生達との類似

先行小説におけるヒロインと樺の木の共通性に着目したい。 と介『或恋愛小説』(大正十三年)にも、「三角関係などは近代的之介『或恋愛小説』(大正十三年)にも、「三角関係などは近代的できる。横の木について考えるにあたり、できれることは従来ほとんど為されていないが、先行小説およびじられることは従来ほとんど為されていないが、先行小説およびじられることは従来ほとんど為されていないが、先行小説およびじられることは従来ほとんど為されていないが、先行小説およびじられることは従来ほとんど為されていないが、先行小説およびにあるが、首にないできる。 大行小説におけるヒロインと樺の木の共通性に着目したい。 大行小説におけるヒロインと棒の木の共通性に着目したい。 大行小説におけるヒロインと棒の木の共通性に着目したい。 大行小説におけるヒロインと棒の木の共通性に着目したい。 大行小説におけるヒロインと棒の木の共通性に着目したい。

子であることと酷似している。また、出自の明確な文三に対して、は崇められていたが今や人々に忘れられた神であり、狐が軽薄才を、頗る智恵才覚が有ツてまた能く知恵才覚を鼻に懸け」、「竪膝の身」のように没落した家の息子であり、一方の昇が「所謂才深の身」のように没落した家の息子であり、一方の昇が「所謂才深の身」のように没落した家の息子であり、一方の昇が「所謂才深の身」のように没落した家の息子であり、一方の昇が「所謂才なの水の流れを堰きかねて折節ハ覚へず法螺を吹く事もある」、をで、頗る智恵才覚が有ツてまた能く知恵才覚を鼻に懸け」、「竪膝かぬ民草もない明治の御世に成ツてからは、土神がもとは、土葬を良い、工薬亭四迷『浮雲』(明治二十年~二十二年)では文子であることと酷似している。また、出自の明確な文三に対して、

昇は「何者の子で如何な教育を享け如何な境界を渡ツて来た事か

ことを次の本文と照らし合わせて考えてみる。已。」と、どこの何者かがはっきりしないとされているが、この過去ッた事は山媛の霞に篭ッておぼろ〳〵、トント判らぬ事而

線を抛却して唐机の上に孔雀の羽を押し立」て、「其後英学を初 「一本の奇麗な女の樺の木」の美しさと共通するが、お勢が新し ンのお勢は「兎にも角にも十人並優れて美くしい」女で、これ 体の知れなさという点でも昇と狐は共通している。また、 土神の住まいは示されているが、狐の住まいは明かされない。得 木とは非常に共通点があるといってよい。もちろん、「そっと返 したり、「手に一部の女学雑誌を把持ち立ちながら読みく~坐舗 個に教育のないといふ者は仕様のないもんですネー。」と繰り返 性である。 りの人笑はせ有晴一個のキヤツキヤとなり済ました。」という女 髪に化けハンケチで咽喉を緊め鬱陶敷を耐へて眼鏡を掛け獨よが めてからは悪足搔もまた一段で襦袢がシャツになれば唐人髷も束 は「根生の軽躁者」で、隣家の娘が学問をはじめると「急に三味 いものに飛びつく女として描かれていることも注目される。 へ這入て来て」というように女学雑誌を読んでいたりする点で、 「ハイネの詩集」に熱中し、天文学や美学の話に夢中になる樺の 離れたぐちゃぐちゃの谷地の中に住んでゐる土神で一人はい この木に二人の友達がありました。一人は丁度五百歩ば つも野原の南の方からやって来る茶いろの狐だったのです。 また、お勢は「学問」の有無にこだわっており、「眞 ヒロイ お勢

事」をする物静かな樺の木と、「畜生:馬鹿:口なんぞ聞いて呉

きなお勢の三角関係という構図は、『土神ときつね』と多くの点没落した家の息子である文三と、軽薄才子の昇と、新しいもの好の間には相違点も見られるものの、かつて権力者であったが今はれなくツたツて些とも困りやしないぞ」と文三を罵倒するお勢と

(神長瞭月)の歌詞を次にあげる。 的スタイルでもある。明治42年に流行した「ハイカラソング」的スタイルでもある。明治42年に流行した「ハイカラソング」でいうのは、「女学生」と呼ばれた女性達の一つの典型

で共通している。

早稲田の稲穂がサーラサラ 魔風恋風そよそよと女学生 片手にバイロン ゲーテの詩 口に唱える自然主義ゴールドの眼鏡のハイカラは 都の西の目白台 女子大学の

また、本作品の現存草稿の表紙に残されている「土神:退職教また、本作品の現存草稿の表紙に残されている「土神に退職教をむしるという行動に着目してみる。 また、本作品の現存草稿の表紙に残されている「土神・退職教また、本作品の現存草稿の表紙に残されている「土神・退職教また、本作品の現存草稿の表紙に残されている「土神・退職教また、本作品の現存草稿の表紙に残されている「土神・退職教また、本作品の現存草稿の表紙に残されている「土神・退職教

の髪毛を両手で掻きむしってゐました。・それからいかにもむしゃくしゃするといふ風にそのぼろぼろ

女性となっている。

- 考へました。・土神はたまらなさうに両手で髪を搔きむしりながらひとりで
- この行動は『蒲団』の時雄にも共通する。以上の三ヵ所において、土神の髪をむしる行動は繰り返されるが、以上の三ヵ所において、土神の髪をむしる行動は繰り返されるが、・土神は頭の毛をかきむしりながら草をころげまはりました。
- 歩きながら渠はかう絶叫して頭髪をむしつた。「兎に角時機は過ぎ去つた。彼女は既に他人のものだ!」
- と、渠は再び頭髪をむしつた。(以上引用・「けれど、もう駄目だ!」

田山花袋

団

生であり、小説家を目指す女という、やはり〈新文化〉を求めるといる。さらに、『蒲団』でのヒロイン、芳子もまた女学で、ある時は全く犠牲になつて二人の為めに尽さうと思った。ある時は全く犠牲になつて二人の為めに尽さうと思った。ある時は此の一伍一什を國に報じて一挙に破壊して了はうかた。ある時は此の一伍一什を國に報じて一挙に破壊して了はうかた。ある時は此の一伍一什を國に報じて一挙に破壊して了はうかた。ある時は全く犠牲になつて二人の為めに尽さうと思った。ある時は全く犠牲になって二人の為めに尽さうと思った。」と述べる心境と共通している。また、「其心は日に幾遍とない。誰だってむしゃくしゃしたものの、結局は狐を殺してしまった土神の心境は化しようとしたものの、結局は狐を殺してしまった土神の心境は化しようとしたものの、結局は狐を殺してしまった土神の心境は化しようとしたものの、結局は狐を殺してしまった。

との重なりが色濃く見いだせるといえよう。 のではなく、当時の〈新文化〉へと憧れ、上昇志向を持つ女たち で従順で清純な乙女に見えるが、彼女の存在はただそれだけのも イン、樺の木は、一見お勢や、女学生芳子たちとは異なる、静か ことである。その中で考えた時、『土神ときつね』におけるヒロ 作品もまた、日本近代文学の大きな流れと決して無関係ではない えることは、極めて独自な世界のものとして捉えられがちな賢治 て創作されたかどうかは定かではない。しかし、この類似から伺 『土神ときつね』が、『浮雲』や『蒲団』といった作品を摂取し

|樺の木と、枯れた「二本」のかもがや

ら

Ŧ

空への上昇志向

土神は、日光のもとで「本統のこと」を言おうと思ってやってき 三者が三者とも、自分たちの生きるべき世界とその価値を忘れて、 象徴されるような〈新〉なるものに惹かれていってしまっていた。 的なものである自分たちの足元にある〈土〉を忘れて、望遠鏡に て、逆上した結果狐を殺してしまう。 たのに結局再び嘘を重ねてしまった狐の「赤革の靴」にはっとし いく。一旦は神として二人を見守ろうとする立場に変化していた 〈新〉なるものへと惹かれていった結果、物語は悲劇へと進んで 樺の木も土神も狐も、 〈旧〉的なるもの、古くからあった自然

かくしの中に手を入れて見ました。そのかくしの中には茶い それからぐったり横になってゐる狐の屍骸のレーンコートの

> らあいてゐた口をそのまゝまるで途方もない声で泣き出しま ろなかもがやの穂が二本はいって居ました。土神はさっきか

狐の騙しのタネだったとしている。しかし、もしそうであるのな をみつけ、「途方もない声」で泣き出すが、ここでの「茶色のか 狐の死骸のレーンコートの中に二本の「茶いろなかもがやの穂」 もっと他の意味が付されているのではないだろうか。 手品で作りだせたはずではないか。この「かもがやの穂」には れ」ないとしており、また山根知子氏も同様に、かもがやの穂が てハイネの詩集や望遠鏡を現出させる、手品の種だったのかもし は「一かもがやの穂」は、孫悟空の髪の毛のように息を吹きかけ 土神は泣くのか。この点に関して先行研究を概観すると、大沢氏 もがやの穂」は一体何を示すのだろうか。そしてなぜそれをみた 穴が、ただのがらんとした穴であることを見て呆然としたのち、 土神は狐を殺してしまったあと、立派な書斎であるはずの狐の巣 狐が最後まで気にし続けていた望遠鏡も「かもがやの穂」の

見られるいのころぐさの穂である。 うひとつの〈穂〉が描かれていることである。それは次の本文に ここで着目したいのが、作品中に「かもがやの穂」以外に、も そのうちたうたう秋になりました。 樺の木はまだまっ青でし

日本国語大辞典によるとかもがやの穂は「六~七月ごろ円錐形の して風に光りところどころすゞらんの実も赤く熟しました。 たがその辺のいのころぐさはもうすっかり黄金いろの穂を出

かわって《聖なる黄金》へと変化した。しかし、〈新文化〉的ななたに描きわけられていることが注目される。「黄金いろ」についてろ」に、レーンコートの中のかもがやは「茶いろ」にというようとになるが、秋になって、土に生えるいのころぐさは「黄金いろ」に、いのころぐさも、「夏、犬の尾に似た緑の穂を出す」らしまた、いのころぐさも、「夏、犬の尾に似た緑の穂を出す」らしまた、いのころぐさも、「夏、犬の尾に似た緑の穂を出す」らしまた、いのころぐさも、「夏、犬の尾に似た緑の穂を出す」らしまた、いのころぐさも、「夏、犬の尾に似た緑の穂を出す」らしまた。

「レーンコート」のポケットの中では、「かもがや」という自然は

に殺されてしまう。が、一方で殺した土神も神としてすでに死ん「途方もない声で」「雨のやうに」泣いたのではないか。狐は土神知った土神は、その悲しさと、自分たちの愚かしさを痛感し、かれるはずがないと思う〈旧〉なる自分へのコンプレックスでが、〈野原の狐〉というありのままの姿ではとうてい樺の木に好が、本質の弧を知った。そして、狐を嘘へと駆り立てたものた土神は、狐の嘘を知った。そして、狐を嘘へと駆り立てたもの

もう飛び出して行って狐を一裂きに裂いてやらうか、けれどだも同然である。

るもの、〈自然〉なるものは茶色く枯れてしまうのだ。が〈新〉なるものに惹かれ、自らの価値を見失った時、〈旧〉な神としての死を迎えていることになる。自然の中の存在それ自体なかったのだ。狐を殺してしまった土神はもはや神失格であり、嫉妬に駆られて狐を殺すことは神として夢にもあるべきことではもそんなことは夢にもおれの考えるべきことぢゃない

樺の木と「ぐちゃぐちゃの谷地」に住んでいる土神とは〈高さ〉「一本木の野原」の「少し小高く盛りあがった所」にある。この

が、樺の木だけは滅びずに生き残っているのである。樺の木は意せねばならない。狐は殺され、土神も神としての死を迎えた。

しかし、あくまでもここで枯れるのが「二本」であることに注

り、飛んでいた鳥に「しっ」と叫んで「低く」落とす。そこに土神は低い草の生える湿地の祠に帰ってきて「横に長々と寝そべで苔やからくさやみぢかい蘆などが生えてゐましたが又所々で苔やからくさやみぢかい蘆などが生えてゐましたが又所々と、低さ〉という点で非常に意識的に描き分けられている。

と進んでいってしまった土神の姿と重なる。がらんとした穴を見ムスに魅力を感じて自分への自信を失い苦しみ、最後には凶行へき続け、結局は幸せになれなかった狐や、顕微鏡やロンドンタイある。このことは、大理石のシーザーや望遠鏡といったホラを吹黄金にはなれずに、茶色の穂となり干からび枯れてしまったので

樺の木は土に生えながら、土の話よりも星の輝く〈空〉の話に夢はっと顔色を変へて棒立ちになりました。けれども又すぐ向ふの樺の木の立ってゐる高みの方を見ると

続く場面は次のようになっている。

望遠鏡を樺の木に持って来ると約束し、最後まで樺の木はそれを中になっていた。そこで、狐は地上から〈空〉を見る道具である横の木は土に生えなから、土の記よりも屋の輝く〈空〉の記に夢

徴であり、それを追い求める上昇志向が彼女の中には渦巻いてい 繰り返し狐に確認している。〈空〉は樺の木にとっての理想の象 の狐は樺の木に望遠鏡の話をしたり本を与えたりする点で、やは る。先ほど確認したように、土神は低い湿地に住んでいる。一方

う、「高み」にあり土を踏み台としながら空へ向かって伸びてい れた「円い穴」という〈低〉い場所である。その中でこの物語の みかもまた、「小さな赤剝げの丘」の「下」の、「赤土」で固めら り上昇志向を持つと思われるが、しかし最後に明かされる狐のす ヒロインが、同じ地上の穴にすむ動物ではなく、「樺の木」とい

てそれを見ました。

る〈木〉として設定されていること自体、この女性の中の抜きん

でた上昇志向を象徴するといえよう。さらに言うならば、この樺

立てるもの、上昇欲そのものの象徴といえるのではないか。 傾倒を促しているのであって、樺の木は、人々の上昇志向を駆り の木に好かれたいと思う気持ちこそが土神と狐二人の〈新〉への 木にとって狐は決して「たった一人のお友達」なわけではなかっ いつも樺の木に本を持ってきてくれた狐はもはやいないが、樺の 死んだ狐にとって、樺の木は「たった一人のお友達」であった。

近くへ寄りませんでした。 が来てゐるときは小さな鳥は遠くからそれを見付けて決して 目白もみんなこの木に停まりました。 たゞもしも若い鷹など

ですから渡り鳥のかくこうや百舌も、又小さなみそさゞえや

樺の木に会いに来るのは土神と狐だけではなく、彼ら二人がいな

かれていることに注意したい。次の部分でも鷹の姿が描かれてい 非常にさりげない記述ではあるが、ここに「若い鷹」の存在が描 くなっても、「渡り鳥」や「若い鷹」が彼女を慰めるに違いない。 鷹が翔けて行きましたが土神はこんどは何とも云はずだまっ 土神はひとりで切ながってばたばたしました。空を又一疋の

る。

鷹は幾度か登場するが、鳥の中でも強者として描かれていること これより前の場面で、土神は「一羽の鳥が自分の頭の上をまっす らゐ高く叫んだり」と、鷹の声の強さが描かれている。また、 が特徴である。『風の又三郎』では「林の中で鷹にも負けないく 悠然と飛んでいくのを見ているばかりである。賢治童話の中でも その鳥を追い払っていた。しかし、ここでは何も言わずに、鷹が ぐに翔けて行くのを見」た時、すぐ起き直って「しっ」と叫び、

おゝ、よだかでないたゞのたかならば、こんな生はんかのち れたでせう。 顔色を変へて、からだをちゞめて、木の葉のかげにでもかく いさい鳥は、もう名前を聞いたゞけでも、ぶるぶるふるえて、

番象徴的なのは『よだかの星』に登場する鷹であろう。

描かれているところも意味深いように感じられる。土神、狐の想 ることはせず、また、しかもそれがわざわざ「若い鷹」であると であり覇者である。その鷹が樺の木の所にやってくると誰も近寄 するどい声と力強い羽ばたきを持つ鷹は、 圧倒的な力を持つ強者

イ」の魔もまた、樺の木の魔性を象徴するといえよう。 に魅せられて、舟も舟人も波にのまれてしまうという「ローレラ 魅せられて舟人がおぼれて死ぬさまを歌うものだが、乙女の歌声(3) つわる伝説によって作られ、岩上に髪をくしけずる妖精の歌声に は、ライン川のフランクフルトとケルンの間の右岸にある岩にま こに「ロウレライ」という詩がわざわざあげられている。この詩 ウレライやさまざま美しい歌がいっぱいにあった」とかかれ、こ の木の恋愛の相手である可能性もあるのだ。樺の木は星空の下、 ハイネの詩集を読みふけっていたが、「そのハイネの詩集にはロ いや嫉妬とは裏腹に、その二者のどちらでもないこの鷹こそが樺

うに語っていることである。 ここで注意したいのは、この語り手がこの言葉を語る前に次のよ えて語り手はこのような〈比較〉という枠組みを提示するのか。 テーマではないことははじめにも述べた通りだが、ではなぜ、あ 語っていた。正直、不正直という内容が、この物語の本質的な ら土神の方は正直で狐は少し不正直だったかも知れません」と 語り手は冒頭で、「たゞもしよくよくこの二人をくらべて見た

り新というように、物事に優劣をつけ、上を目指そうとするその 木の判断の危うさを示している。土神よりは狐、土より空、旧よ いうよりは、この「どちらかと云へば狐の方がすき」という樺の 葉は、土神の方が狐より優れているということを主張していると ここでの「土神の方は正直で狐は少し不正直」という語り手の言

樺の木はどちらかと云へば狐の方がすきでした。

しあさっての朝までに、お前がさうしなかったら、もうすぐ、つ 続けることだろう。姿を見ただけで周囲が恐れ近寄らない、 生き残った。土に生えながら土を忘れ、それを踏み台として空ば 愚かさへの強烈な批判が込められているといえるのではないか。 かみ殺すぞ」という鷹の姿は、彼女が常々「ぶるぶるふるえ」な しれない。しかし、『よだかの星』で、よだかに改名を迫り、「も 会〉での絶対的な権力者「若い鷹」との恋も暖められていくかも かりを目指している彼女はこれからも何も変わらず青いまま生き 味をなさないものになっていることには、〈比較〉という行為の は少し不正直」という価値基準が物語の本質からずれており、意 木と同様〈比較〉を行い、その結果下した「土神の方は正直で狐 もが、「たゞもしよくよくこの二人をくらべて見たら」と、樺の がすき」という樺の木の判断の危うさを指摘する語り手自身まで 志向自体の危うさが示されているといえよう。さらに、「狐の方 土神と狐が、精神的、肉体的な死を迎える中で、一人樺の木は

女の行く末もまた、明るいものではないのかもしれない。 「一本木の野原」という寂しい地に一人立ち、〈空〉を仰ぎ見る彼 しても、そこにまた同じ苦悩が待ち受けているとも限らないのだ。 として〈土〉に縛られることを逃れようとして、〈空〉へと逃避 がら恐れていた土神の凶暴さともどこか重なる。樺の木が

(木)

注

1 小沢俊郎「「土神と狐」の主題」(『四次元』一九五六年九月)

- 2 小森陽一『最新宮沢賢治講義』(一九九六年(朝日新聞社)
- 3 松田司郎「土神ときつね」(『国文学』二〇〇三年二月臨時増刊
- 4 夜、裸足と靴、といった多くの二項対立が指摘されている。 の克服」(『宮沢賢治研究 annual』一九九一年三月)では、昼と 一例をあげれば、大沢正善「「土神と狐」とその周辺―「修羅
- 5 に樺の木に会おうとする箇所がみられる。その点については本論 但し、土神と狐にはそれぞれ一箇所ずつ、土神が夜に、狐が昼
- 6 賢治研究 annual』一九九一年三月。なお、本稿における大沢氏 三章で触れる。 の引用は、全てこの論文に拠る。 大沢正善「「土神と狐」とその周辺―「修羅」の克服」(『宮沢
- (7) 大塚常樹『宮沢賢治 心象の記号論』(一九九九年 朝文社)。 なお、本稿における大塚氏の引用は全てこの論文に拠る。
- (8) 『新宮沢賢治語彙辞典』(一九九九年 東京書籍)に、「夏、犬 の尾に似た緑の穂を出す」とある。
- 9 学』一九九五年九月 伊藤典子「宮沢賢治「土神と狐」論」(『東京女子大学日本文
- <u>10</u> るかも知れない」という「をどる」心持ちへと一時的に変化して の深い晩」樺の木に会いに行こうとする箇所があるが、その時に いることが注目される。 も「むしゃくしゃ」した心理状態から「樺の木は自分を待ってゐ 一方、常に昼間に樺の木を訪れていた土神も、「八月のある霧
- (11) 工藤哲夫「土神と狐の物語―那珂(中勘助)『提婆達多』から 品との類似に着目する。 達多』の影響が論じられている。提婆達多と、土神、狐の二者の 類似を指摘しているが、本論では、樺の木も含めた上で、先行作 の影響」(『女子大国文』二〇〇四年一二月)では、中勘助『提婆

- (12) 古茂田信男編『新版日本流行歌史』上』(一九九四年
- なのだが、それが無い」としている。 原敦編『日本文学資料新集26 小倉氏も「彼の読んだ本がまとまって残っていればいと易いこと 賢治の読書体験については、小倉豊史「賢治の読んだ本」(栗 有精堂出版)に目録があるが、それも一部的なものであり、 宮沢賢治 童話の宇宙』一九九〇
- 14 ける。 摘する、典型的な〈女学生ことば〉である点も、このことを裏付 『ヴァーチャル日本語役割語の謎』(二〇〇三年 岩波書店)の指 また、「~ですの」「~だわ」等、樺の木の言葉違いが、金水敏
- <u>15</u> 沢賢治研究 annual』 一九九四年三月) 山根知子「「土神と狐」の修羅性―土の意味をめぐって」(『宮
- <u>16</u> 『日本国語大辞典第二版 第三巻』(二〇〇一年
- 17 『新宮沢賢治語彙辞典』(一九九九年 東京書籍)
- 『日本国語大辞典第二版 第十三巻』(二〇〇二年

【付記】

『浮雲』は『二葉亭四迷全集第一巻』(筑摩書房、一九八四年)、田山 省略記号は全て稿者の付したものである。 り引用した。旧字は適宜新字に改め、ルビは省いた。なお、傍線及び 花袋『蒲団』は『定本花袋全集第一巻』(臨川書店、一九九三年)よ は『芥川龍之介全集第十一巻』(岩波書店、一九九六年)、二葉亭四迷 九五年~二〇〇一年 筑摩書房)による。芥川龍之介『或恋愛小説』 宮沢賢治作品の本文・引用は全て『【新】校本宮澤賢治全集』(一九

本学大学院博士後期課程—